

---

# 体育科

## 運動の真の面白さを追究する子の育成

今井 茂樹 赤坂はんな 長澤 仁志 佐々木 賢治 佐藤 牧子 塚本 博則

---

本校体育科部では、「運動の面白さに没頭すること」を大切にしている。なぜならば、運動に没頭していれば、そこから新たな課題が生まれ、高い目標を設定したり、必然的に質の深い学びに向かっていくからである。児童が運動の面白さに没頭し、追究できるような学習環境を教師がデザインする。そして、学習過程において教師と児童間の運動の面白さの捉え方・考え方を重ね合わせることを大切にしていきたい。双方向からの振り返りをもとに毎時間の学習課題を設定し、児童が課題達成に向けて自己・他者・運動との三位一体の対話的実践を行い、学びを振り返ることができれば、運動の面白さを追究できるのではないだろうか。

### 1. 体育科の研究テーマ

#### (1) 昨年度の成果と課題を踏まえて（

- ・運動の面白さの捉え方・考え方には、教師・児童間において「ズレ」が生じる。その「ズレ」をいかに擦り合わせていくかが、その運動がもつ面白さを味わわせる上で必要不可欠であることが明らかになった。運動特性を教師が十分に理解し、児童とともに授業を創造していくことが重要である。一方で、児童の姿や想いばかりに目を向けてしまった結果、運動特性とかけ離れた学習が展開されてしまうことが課題として挙げられた。昨年度の課題を踏まえ、運動特性を教師が教材研究段階で理解し、児童とともに面白さを追究していくことが求められる。
- ・「こえる」については、昨年度、跳び箱運動の佐々木実践から、「高さをこえる」「自分の課題をこえる」「動きをこえる」など身体と知を重ね合わせた多数の「こえる」が存在することが明らかとなった。これらの多数の「こえる」姿をどのように見取り、面白さの追究につなげていくのかを今年の重点としていきたい。

#### (1) 体育科における問題意識

近年ではスポーツが多様化し、大きな広がりを見せている。特に競技スポーツの拡大傾向が加速しており、2020年の東京オリンピック・パラリンピックはもとより、世界規模のスポーツイベント開催に向けて多くの種目でジュニア層からの競技化が進んでいる。こうした競技面に加え、市民スポーツも大きく広がっている。市民マラソンに代表されるように老若男女や障害の有無に関係なく、各々の力や関心に応じて参加できる市民向けの大会が各地で開催されるようになってきている。また、スポーツが観光や行事と連携し合い、地域振興や企業業績を図るといった事例も数多く見られている。

このようにスポーツ自体が多様化し、それに伴ってスポーツへの関わり方も多様化している。

スポーツの多様化が進む中、新学習指導要領が示された。大きな柱として「資質・能力の育成」が挙げられ、ここでは、将来の予測困難で複雑な変化の激しい社会を想定し、汎用性のある能力の育成を目指している。それは、児童が学校に通っている時期はもとより、学齢期を終えて社会人になったときでも生かされる能力を身に付ける、という目標が設定されている。体育もその大きな枠組みの中にあり、「生涯にわたる豊かなスポーツライフ」という視点が学齢期はもとより、学齢期を終えた視点も想定していると言えよう。

これまでも全国的にたびたび取り上げられる「運動能力の二極化」と「体力の向上」への対応は、本校の課題でもある。多くの児童が電車やバスを利用するなど、通学に長い時間を要しているため、放課後の時間や帰宅後の遊ぶ時間が保障されていない。よって、日常生活の中で遊びや運動が定着せず、体力や運動能力の低下傾向があることは否めない。

だからこそ、学校が意図的・計画的に運動に出会わせなくては、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育むことが難しいのではないだろうか。

また、「運動が苦手だからといって運動に対して壁を作ってしまう子」、「ミスを恐れ、積極的にボールとかかわれない子」、「ミスを責められ、消極的になってしまう子」が本校にも見られる。このような児童は、主体的に運動に関われない傾向にある。運動に没頭する経験が乏しいことが大きな要因の一つであるし、運動を得意とする子の周りの友達へのかかわり方にも起因する。すべての児童に「主体性」を保障していくことは、ポジティブで多様な経験を積む基盤となり、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、学校体育はもちろん教育課程全体に求められる課題であろう。

## （２）テーマ設定の理由

本校体育科部では、「運動の面白さに没頭すること」を大切にしている。なぜならば、運動に没頭していれば、そこから新たな課題が生まれ、高い目標を設定したり、必然的に質の深い学びに向かっていくからである。その過程において対話が生まれ、結果的に「技能・知識」や「思考力・判断力・表現力」を深めていくことにつながる。そのためには、「運動の面白さに没頭し、追究できる学習環境」をデザインしていくことが重要となる。これは、本校の研究テーマの「こえる学びを生む学習環境デザインの追究」とも換言できる。

重点となることは、「教科（運動）の本質的意義（その教科でしか教えられない価値ある内容とは何かを捉える視点）」を生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点から、その面白さや喜びと体力を向上する役割から捉え直し、「する・みる・支える・知る」の多様なかかわり方と関連づけて整理していくことである。具体的には、児童が運動の面白さに没頭し、追究できるような学習環境を教師がデザインする。そして、学習過程において教師と児童間の運動の面白さの捉え方・考え方を重ね合わせることを大切にしていきたい。双方向からの振り返りをもとに毎時間の学習課題を設定し、児童が課題達成に向けて自己・他者・運動との三位一体の対話的实践を行い、学びを振り返ることができれば、運動の面白さを追究できるのではないだろうか。

上述したように、運動の面白さに没頭し、追究する姿こそが「運動の真の面白さを追究する姿」であり、「こえる学びの姿」と言えよう。

## （３）運動の真の面白さとは

「運動の面白さとは、【内的必然性】を根拠に語ることができる。【内的必然性】という考え方はロシアの画家カンディンスキーが語っている。要約して述べると、人間は芸術や音楽に【必然】として感動する本質を持っている、という議論である。これは、よく知られたホイジンガの遊びについての考え方に通じるものである。」<sup>1</sup>児童の「必然性」のスタートは運動そのものが持っている特性や魅力＝「運動固有の面白さ」にあり、それをスタートにした「必然性」の連鎖の中に、身につけさせるべき内容が、児童自身の「めあて」として持たなければならないのではないかということである。

すなわち、「運動の真の面白さ」とは、運動そのものが持っている固有の特性や魅力を必然性の連鎖の中で、個々が適切なめあてをもち、追究することにより、深まったもの・こえたものと捉えることができる。その過程において、教師と児童間の面白さの捉え方・考え方にズレが生じると考えられる。そのズレの修正作業を重ねることが、運動の面白さを追究することにつながり、運動の真の面白さに迫ることができると思われるのである。

## （４）育てたい児童像

研究テーマ「運動の真の面白さを追究する子の育成」の具現化を図るため、育てたい児童像を次のように設定し、

研究を進めることにした。

- 「自己」「他者」「運動」との三位一体の対話を通して、運動の面白さに没頭し、追究できる子
- 「する・みる・支える・知る」の多様な運動へのかかわり方を通して、主体的に運動に親しむことができる子
- 多様な運動経験を通して得た学びを、身体的な振る舞いや自分なりの言葉で表現できる子

## 2. 全体研究テーマとの関連

### (1) 体育科における「こえる」学びとは

研究部提案では、「a 現状を改変し創造すること」、「b 概念理解にとどまらず実践すること」、「c 個から集団に拡張すること」を「こえる学び」の具体として示している。

この提案を受け、体育科部では、「運動の面白さに没頭し、振り返る活動を通して、新たな自分の発見や新たな知を創造すること」や、「自己・他者・運動との三位一体となった対話を行い、運動の面白さを追究すること」を「こえる学び」の具体として捉えている。すなわち、運動の面白さに没頭し、追究する姿こそが、体育科部が求める運動の真の面白さを追究する姿である。

このような「こえる学び」の姿は、教師と児童間に生じる運動の面白さの捉え方・考え方のズレの修正作業の積み重ねが前提となって生まれるものである。

### (2) 今もっている力から始まる学び

「こえる学び」には児童自身の学習に対する主体性と必要感が要件となる。

新しい運動に出会った際、「今もっている力」で運動に親しみながら、自分の身体の状態や動きに気づき、何ができるのか、できないのかを知ることが大切である。これは、「現状を改変し創造すること」の基盤となることである。教師が一方的に学習課題を提示し、ドリルやタスクのような課題を課し、スキルアップを目指す学習過程では学習に対する主体性と必要感は生まれない。

今もっている力で十分楽しめる運動との出会いが必要不可欠であり、児童自らが課題を見つけ、学びの見通しをもてるよう、教材や学習過程の工夫をしていかなければならない。

### (3) 「こえる学び」を生む学習環境デザインの視点

先述したように、本校体育科部では、「運動の面白さに没頭すること」を大切にしている。運動の面白さに没頭するためには、自己やチームの学習課題を自ら見つける力が求められる。すなわち課題は、与えられたものではなく、自ら派生するものという捉え方である。

自分ごととして考えた、あるいは発見した学習課題については、自己・他者・運動との対話を通して、深い学びとなり、知の創造につながる。そして、新たな課題が生まれる。この積み重ねこそが「振り返りによる学びの自覚」である。

こうした「振り返りによる学びの自覚」を通して、「今の自分やチームをこえた」「運動って面白い」と実感できるような学習環境デザインを構築していきたい。運動の面白さを追究する学習環境デザインについては、研究の重点で述べる。

## 3. 研究の重点

### (1) 運動の面白さに没頭できる魅力的な教材の工夫

「やってみたい」「おもしろそう」児童の目がキラキラするような運動との出会いが大切である。また、「今もって

いる力で十分楽しめる」ことも教材を創る際、必要な視点となる。この視点は全ての学校の体育科全領域において外せない絶対条件であろう。教材が魅力的であれば、それだけで児童は運動に夢中になる。

提示された教材そのものに挑戦・達成欲求があり、発展できるようなバリエーション豊かな工夫があれば、多面的に現状をこえていけることは容易に想像できる。すなわち、「こえる」の入り口となるのではないだろうか。教具や場の工夫、ルール工夫、新しい教材の開発など、魅力的な教材を提案していきたい。

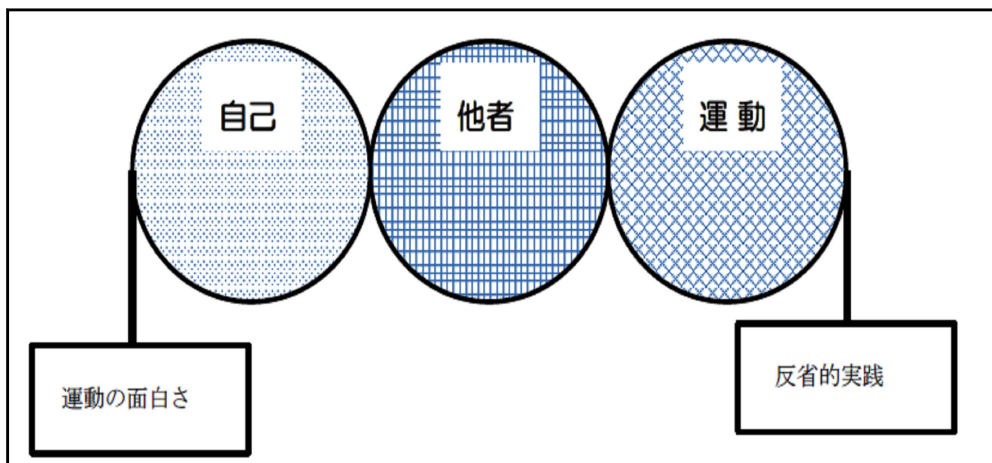
### (2) 運動固有の面白さに対する捉え方・考え方の教師と児童の共有(ズレの理解・ズレの結びつけ・新たな課題共有)

運動の特性は、教師が密な教材研究を通して理解した運動固有の面白さと捉えることができる。この運動固有の面白さは全員に味わってほしい必要最低限の面白さである。運動の特性を味わった先に出会う、換言すれば「運動の特性をこえる面白さ」が運動の真の面白さである。

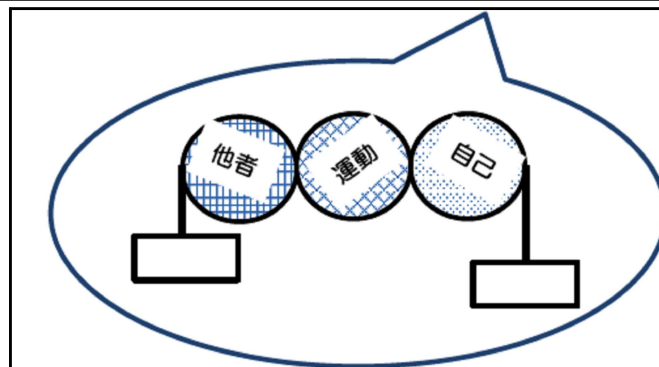
児童が主体的に運動の真の面白さを味わうためには、毎時間の児童の姿(動きや振り返り)を重視し、児童の視点からの運動固有の面白さを捉え直し、教師と児童の面白さの捉え方・考え方のズレを理解し、共有化を図るべく、振り返りを行う。そして、活動や振り返りを分析し、教師の思い願いを加味しながら次時の学習課題設定していく過程を毎時間積み重ねていくことが重要である。こうした作業から見えた運動の面白さを追究している具体的な児童の姿を取り上げ、本時の学習課題を提示していきたい。

### (3) 自己・他者・運動との三位一体の対話的实践

毎時間、設定した学習課題が児童にとって必要感があれば、学習課題に主体的に取り組むようになり、自己・他者・運動との三位一体の対話は自発的に生まれるであろう。三位一体の対話が一層強化されるよう、ICT導入や、教具や場、ルールの工夫など学習環境を整えていくことも重視していく。



自己・他者・運動がそれぞれ独立しているのではなく、常に連動し、協働的に互恵的な関係性を持ちながら、学びを深めていきたい。



## 4. 成果と課題

- (1) 成果
- (2) 課題

\*1 松田恵示 (2017) 「新しい時代のボールゲームを求めて」体育科教育 65 巻 2 号 pp.12-16 大修館書店